

ヨーロッパの旅

パリーに旅す

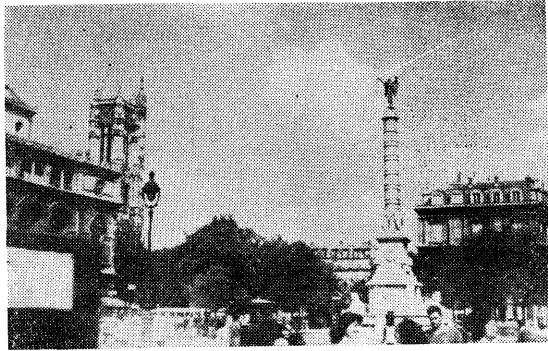
平井信義

パリーと言えば、われわれ日本人にとって懐れの地である。「パリーへいきたい」——この願いは、私にも小さい時から育まれていた。小学校三年の時であったか、逋信省にいた叔父がパリーに留学して、たびたび私の父へ絵葉書をよこしたのを見る機会があった。エッフェル塔、ノートルダム、ヴェルサイユ宮殿——総てが世界的に名高いものであり、世界のファッションの発生地であり、すばらしく美しい女の人が歩いているようにも聞かされた。しかし、それは非常に遠いところ、船に乗って印度洋を通り、スエズ運河を通って、何十日もかからなければ到達できない国のよりに教えられていた。

そのパリーへ、旅する機会がやってきた。

三月下旬、まだ外套を着けてもなお朝晩は、寒さの肌沁み入る頃であった。スイスの旅を終えて、最後にバーゼル(ヘイル)を出発したのは、夜の十時を過ぎていた。バーゼルは、スイスとドイツ・フランスの国境になっているから、フランスにいく乗客たちは、駅の改札口に入る前に、税関を通る仕組みになっていた。汽車は幸い空いていたので、私は体を横にすると、間もなくうつらうつらし始めた。気がついた時には、すでに夜は明けていて、太陽が屋根ごしに、客車の玻璃にちらちらと映じた。フランスの家屋に独得な、屋根の上に立並んだ小さな煙出しが太陽の光をさえぎるのであった。

「パリーまであと何時間くらいでしょうか？」



と、止っている時計のゼ

んまいを巻きながら、向いに坐っている女の人に英語で書いた。中年のその婦人は、手をふりながら、

「私は英語は話せません」

と、微笑して言った。それが本当か嘘か知らない。

フランス人は、たとい他国語を知っていても、それを使ったがらないということを私は聞いていた。そして、

そのことはバリーの病院を訪れたときも、強く感じたことであつた。

一般に、ヨーロッパでは、自国語を大切にしている。英語さえ知っていれば、どこでも通用するというわけにはいかない。大きなホテルを泊り歩いていけば、英語で用が足りるであらうが、ちよつと小さなホテル、あるいはパンジオンに入ると、英語はおぼつかなくなる。これはスカンジナビアの諸国でも不自由したことだし、イタリアでもオーストリアでも体験したことであつた。

むしろ、自国語を重んずる気持は、愛国心に通ずるものであつた。

ヨーロッパの生活の中で、「愛国心」はいやというほどに見せつけられた。西ドイツの医局で、教授がフランスの研究について、非難するようなことを吐いた時のことであつたが、そこに合せた医局員たちは、一斉に机を鳴らし、足をどたどたと踏み鳴らした。これは、感激を現わす行動なのである。私にとっては神経に障るような仕草であつたが、彼らは非常に満悦した面持をしていた。

ところが、その部屋を出ると、私と肩を並べて歩いていたベルギーからの留学生のフリッケ君は、「あの研究ではドイツよりもベルギーによい研究があるのですよ」と、わざわざ私に耳打ちしたものである。

オランダの幼稚園を訪れたとき、幼稚園の保育時間がドイツよりもなぜ短いのですかと私が質問したのに答えて、女の園長は、「オランダでは、ドイツとはちがつて、家庭が子どもを大切にしているのです。ですから、家庭での生活を多く子どもに与えるように、私どもは考えているのです」

と言つたのを思い出す。

イギリスの病院を訪れたとき、案内してくれた医者に、「ドイツで十か月勉強していた」ことを告げると、「ははあん」と、あまり感心しないような顔をして、それ以上たずねようとしなかつた。

った。

私がドイツでの留学を終える頃、アメリカに渡る計画を教授のワイセ博士に話すと、

「どうして、アメリカなどに行くのか。その必要はないではないか」

と、アメリカ人の視野の狭さを私に語ってくれた。

こうした中であって、私もしばしば「大和魂」を發揮せずにはいられなくなった。しばしば、日本のよさを誇張さえて言う気持ちに迫られたのを思い出す。

その頃、日本では「平和論争」がさかんであった。日本から送られた「平和論争」を読みながら、私は「日本という国が、海で囲まれ、国境を接していない、——本当にのんきな島国だなあ、」と思わずにはいられなかった。

戦っては国境をしばしば変更しなければならなかった国々、領土の奪い合いを繰返した国々——すでに、方々の国の血筋が流れているひとの多いドイツ人であり、フランス人であり、ベルギー人であるはずなのに、それ以上に、国境が問題となるヨーロッパの国々であった。わが国の「平和論争」は、そうした血潮を経験しない、のんきな論争であるように、私は胸にこたえた。しかし、それだからこそ、本当の平和を考えることが出来るのだという声も、かすかに、言いわけの気持も手伝いながら、考えたもの



であった。

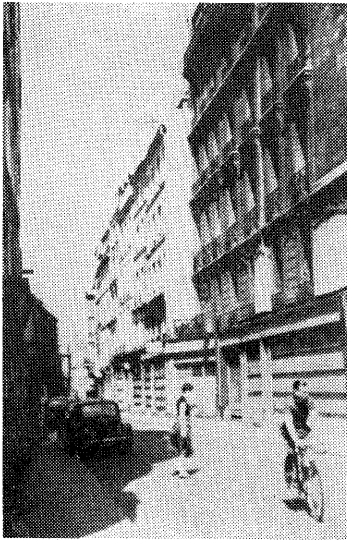
子どもたちも、他の国の子どもに負けてはならない——という気概を持っている。二年生になるヨーヘンと、自動車の話をし始めたとき、私は東京にたくさんフランスの車ルノーが走っているといったら、なぜフォルクスワーゲンを日本が買わないのか、世界で一番優れた自動車だ、と私に詰め寄ったのを思い出す。また、私の和製の写真機アイレスで撮した写真を手にして、ドイツの写真機のライカを知っているか、と目を輝かしたその顔もはつきり思い出す。

外国というと、何かすばらしさの待っているように感ずるわが国の子どもとは異って、彼らの旅行といえば、他国に行くことである。フランクフルトにいたとき、下宿していた家の子どもは小学校六年生であったが、母親と一しょに乗合バスでスペインへ旅行して来た。——本当にわが国には、島国としての特徴が国民

性の中に育まれないわけにはいかないのを、しみじみ感じたものである。

(二)

さて、バリーの北駅に着いたのは、八時近くであった。早速地図を買って、駅の構内の小さな食堂に入り、フランスパンをコーヒーでひたしながら、地図に見入っていた。荷物をおきに、大学都市にある「日本館」にたどりつかなければならない。バスの径路を見たが、どうもうまく乗りこなせそうもない。タクシーはばかばかしく高いそうである。どうしようかと思案していた時に思い出したのは、地下鉄が非常に便利に出来ていると言った友人の



ことば
で あ
る。私
は二つ
のトラ
ンクを
持ち上
げて駅
の正面
を地下

道へ下りていった。

四十フラン(四十円)を渡すと切符を出しながら、駅員は「メルシー(ありがとう)」といった。私もあわてて「メルシー」といった。「ありがとう」は、どこの国でも習慣になっている。ドイツでも、切符を渡すとき、受け取るときには、両方で「ダンケ」をいう。イギリスでも「サンキュー」をいう。このフランスでも、「ありがとう」は常用語である。

私は改札口にある大きな地下鉄の地図をみた。その前に立って、行く先を示したボタンを押す。そうすると乗替えの場所が次々と地図の上に灯る。なるほど便利だ。あとは、それぞれの電車の系路の終着駅をおぼえておいて、地下道に張り出されてあるその終着駅の名前を追って歩いていけば、目的の電車にのれるし、また乗替えのときも、同じようにしていけばよい。かくして私は、無事に「日本館」についた。

荷物をおくと、私は地下鉄に乗る興味に誘われて、エトアールまで出た。

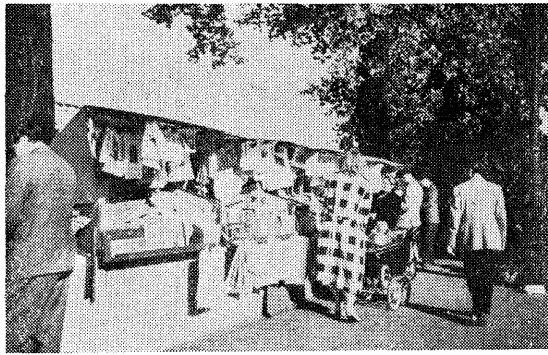
そして、目の前に凱旋門を見、それをくぐり、シャンゼリーゼの広い道をぶらぶらと下った。リュクサンブールにもいった。ボンヌフからノートルダムへ抜けた。いたるところ、足の及ぶ限り歩いた。

しかし、私の心には何か期待外れの感がした。歩いている人た

ちは、パリージャンに違いない。

しかし、流行の権化などいう人たちは、どこにいるのだろう。黒い外套を着た太ったおばさんが、買物かごを下げてせっせと歩いていく。ネクタイもしないで、手をポケットにつっ込んだままぶらぶらしている青年もある。

凱旋門、エッフェル塔、そしてシャンゼリーゼなどの広大な道路がなかったら、世界の屋根に来たという感慨は生じなかったであろう。



それ以上に意外であったのは、非常にたくさんさんの黒人やアジアの国々の人に行き交したことである。中には真白な顔に金髪を束ねた若い女の人と黒人とが、手をつないで歩いてた。そして、東洋の一角からはるばるやって来た私に、一べつさえも加えるものがなかったのである。

西ドイツにいるときは、実に多くの人たちから顔を

ながめられた私である。電車の中で、夫婦と子どもの三人にじっと見詰められて閉口したのを思い出す。はじめは顔に何かついていないのかと訝ったほどであるが、彼らは、東洋人を珍らしそうに見ていたのであった。学校への行き帰りにも、そのようなことがしばしばおきて、不愉快なときは道をかえたこともあった。

しかし、このパリーでは見られることは全くない。あとで聞いた話であるが、羽織袴で歩いた日本人があったそうだが、誰も振向かなかったという。それほどに、国際的な町なのである。私は何か、東京に帰って来たような気がして、たちまちパリーになじんでしまった。

そして、何ということなく、ぶらぶらと街の中を歩く気安さをじゅうぶんに味った。

*

*

*

*

*